

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳講義

山岡洋一

- 翻訳はなぜ難しいのか

翻訳がそれほど難しいのはなぜなのか、その理由は結局のところ、ひとつしかない。翻訳が難しい理由、それは翻訳が簡単だという点にある。

古典翻訳塾

山岡洋一

- 古典翻訳塾第1期塾生募集の案内

12月9日締め切りで第1期塾生を募集。

古典翻訳塾

山岡洋一

- 古典翻訳塾説明会の報告

11月13日の説明会では幸運が重なって、出版社に翻訳家を紹介できた。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期講読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳はなぜ難しいのか

翻訳は難しい。ほんとうに難しい。その証拠に、大量に出版されている翻訳書のなかで、名訳と呼べるものはごくごくわずかしかありません。文句なしの名訳と呼べる作品を出しつづけている翻訳家はなかなかいません。10 人はいても、20 人探し出すのは至難の業です。

では翻訳がそれほど難しいのはなぜなのか、その理由はいくつかあります。ですが、結局のところ、翻訳が難しい理由はたぶん、ひとつしかありません。翻訳が難しい理由、それは翻訳が簡単だという点にあります。

翻訳は簡単です。じつに簡単です。慣れ親しんだ分野なら、原文を読むのとほぼ同時に翻訳を進めていくこともできます。キーボードを叩き、仮名漢字変換を使って文章を入力していく作業には時間がかかるので、完全に同時というわけにはいきませんが、ほぼ同時であれば、十分に可能です。たとえば、ごく普通の単行本 1 冊なら、1 か月で楽々訳すことができます。週休 2 日どころか、週休 3 日でも訳せます。翻訳はそれくらい簡単なのです。ですが、楽々と翻訳した結果は悲惨です。これなら原文を読んだほうが良いと思われるような訳になります。

翻訳は簡単です。だから翻訳は難しいのです。翻訳には、時間も手間もかけず、楽々で行う道が用意されています。楽な道があれば、それを使いたくなるのが人情というもの。ですが、この楽な道を選ぶと、悲惨な結果になるのです。誰でも選びたくなる楽な道を避けなければまともな翻訳はできません。ですが、楽な道はいつも目の前にあります。一瞬気を緩めると、そうとは意識しないまま楽な道に入り込んでいます。一瞬たりとも緊張を緩めてはいけません。これが翻訳の難しさの根幹です。

では、楽な道とはどういう道なのか、楽な道を避けるにはどうすべきかを考えていきましょう。

英文和訳の道

欧米の翻訳論を読んでいて、外国語学習で翻訳

が果たす役割という項目があり、少々驚いたことがあります。欧米では外国語教育に翻訳を取り入れているのかと思ったのです。読んでいって分かったのですが、驚くようなことではありませんでした。論じられていたのは、日本でいえば、英語教育での英文和訳についてだったのです。

英文和訳なら誰でも知っているはずですが、中学高校の英語の時間に教えられているからです。たぶん、英文和訳の学習の集大成といえるのが、大学入試でしょう。大学入試の英語には 2 つの特徴があります。第 1 に辞書が使えません。第 2 に時間が極端に限られています。

第 1 の点について。辞書が使えないのは当たり前ではないかと思えるかもしれませんが、少し考えてみると、英文和訳や英作文の問題があるのに、辞書を持ち込めないというのは、じつに奇妙なことです。現実の世界では、英文を読んだり書いたりするときに辞書を使わないのは非常識だといえるからです。入試では辞書が使えないので、入試問題に使われそうな単語や熟語などをすべて覚えておかなければなりません。知らない単語がでてきたら、お手上げになりかねないからです。

第 2 の点について。入試では 90 分などの短い時間のなかで、大量の問題を解かなければならないのが普通です。大量の問題のうちのひとつに英文和訳があった場合、読んだらすぐに回答を書かなければいけない。意味をじっくり考えるような余裕はありません。機械的に訳していくしかないのです。

入試のこのような性格を考えてみれば、中学高校で学んだ英語、とくに受験勉強のときに学んだ英語がどういうものだったかが理解できるはずですが、英文を読んだときに、意味をじっくり考えることなく、機械的に訳せるように訓練するのが、学校英語、受験英語の目標になっていたはずですが。

英文和訳ではたぶん、学校英語のノウハウは 2 点にまとめられます。第 1 は、原文の構文を素早く読み取って、決まった訳し方で訳すことです。

関係代名詞の制限用法は後ろから訳す、as soon as は「～するやいなや」と訳すといった具合です。第2は、単語や熟語の訳語をたいていは1つだけ、多くても2つか3つ覚えておいて、文脈に関係なく使うことです。たとえば he とあれば「彼は」と訳し、but とあれば「しかし」と訳します。受験英語ではこのようなノウハウを極限まで合理化しています。

もちろん例外もありますが、翻訳の仕事をしように考える人は、たいていの場合、学校英語、受験英語が得意だったはずで、英文を読んだときに、意味をじっくり考えることなく、機械的に素早く訳す訓練を十分に受けて、好成绩をあげてきたはずで、そのうえ、翻訳を何年か続けてくれば、時間も手間もかけず、楽々と訳せるようになるのは当然です。楽な道が開けてくるのは当然です。そして、英文和訳でどういう訳文ができるかを考えれば、これがいかに危険なことなのかが分かるはずで、

翻訳調の道

学校英語、受験英語の英文和訳は現在の感覚で考えればいかにも不合理だと思えるかもしれませんが、もともとは時代の要請にこたえられる優秀な学生を選別するという目的に合わせて作られたものです。当時の時代の要請とは、欧米の進んだ科学技術、理論、思想などを急速に取り入れることでした。そのための手段の柱になっていたのは翻訳です。ですから、明治大正の時代には、高等教育機関の中心的な役割のひとつが翻訳家養成でした。当時、翻訳のスタイルとして使われていたのがいわゆる翻訳調なので、大学入試で、翻訳調の翻訳能力を確認しようとするのは当然でした。

翻訳調の特徴をみていくと、原文と訳文とで、構文や単語・熟語の一対一対応を追求する点など、学校英語、受験英語に似ていることがはっきりしています。これは偶然ではありません。翻訳調のスタイルがあり、それを簡略化したのが学校英語であり、受験英語だと考えるべきです。

翻訳調の最大の特徴はたぶん、原文の語句と訳語の一対一対応でしょう。たとえば、原文に nation と書かれていれば「国民」と訳し、意味は同じでも country と言い換えられていれば「国」と訳し、society と言い換えられていれば「社会」と訳していきます。また、nation が少し違った意味で使われ

ており、たとえば国がなかった原始時代について論じた文脈で使われていても、「国民」と訳しません。何が書かれているかよりも、どう書かれているかを重視するのが翻訳調の特徴です。原文で原著者が伝えようとした意味よりも、原著者が使った言葉を重視するのが特徴なのです。

翻訳調の翻訳は、入試の英文和訳とはいくつかの点で違っています。大学入試の英語には前述のように、辞書が使えないこと、時間が極端に限られていることという特徴がありますが、翻訳調の場合にはどちらの特徴もありません。辞書は使えるどころか、最良のものを使わなければならないとされています。時間についていうなら、ほとんど無制限にといえるほど使えるのが常識でした。翻訳調の全盛期には、とくに優秀な学生が大学に残り、一生の生活を保証されて、一生の仕事として翻訳に取り組む仕組みになっていたからです。この2点で、翻訳調は入試の英文和訳より簡単だともいえます。

しかし、翻訳調はそもそも、とても理解できるはずがないほど進んでいる欧米の書物を取りあえず日本語で読めるようにしておくことを目的としていますから、入試の英文和訳とは比較にならないほど難しいのが当然です。意味が分からないほど難しいからこそ、翻訳調というスタイルを使って翻訳するのです。

原文と訳文とで、構文や単語・熟語の一対一対応を追求する点では翻訳調は入試の英文和訳に似ていますが、原文に理解するなどとてもできないほど難しい概念があらわれ、訳語が決まっていない語句が使われている点では、入試問題とは違っています。こうした概念や語句をどう訳すかが、翻訳調では最大の問題になります。

こうした概念や語句にぶつかったとき、どうするか。たいていは、漢字を組み合わせる新しい訳語を作る方法が使われます。こうして作られた訳語は、何らかの意味を読者に伝えるためのものではありません。意味が分からないが、これこれの語句が原文のこの箇所に使われていたと読者に伝えるための符丁のようなものなのです。先人が作った符丁と自分が作った符丁とを使って訳していくのですから、これは素人にはとてもできない仕事です。専門家が本業として行うのが翻訳調の翻訳です。

ですが、専門用語の訳語という符丁さえ決めてしまえば、翻訳の作業そのものは英文和訳の回答を書くのとそう変わらないものになります。翻訳調が使われるのはそもそも、意味を理解することなどとてもできないほど進んでいる欧米の書物を取りあえず日本語で読めるようにしておくためですから、意味を考えなくても訳せる仕組みになっています。もちろん、訳者はその分野の専門家ですから、原著者が何を伝えようとしたのかを考えないはずがありませんが、意味を考える作業と翻訳の作業とは切り離されています。翻訳にあたっては、原文の意味を読者に伝えるのではなく、原文の表面を忠実に正確に訳すことだけを目標にします。それとは別の作業として、原文の意味を考え、その結果は、普通、解説書、研究書などの形で発表します。翻訳書と解説書・研究書が対になって、専門家としての仕事が完成するようになっていきます。

翻訳調は読者に意味を伝えるものではないので、読みやすくはありません。原文の表面を、表面だけを正確に伝えることを目的にしていますから、読みやすいものになるはずがないのです。普通の感覚で読むと、良くいえば難解、悪くいえば支離滅裂と感じられるはずですが、原文の一語一句を正確に訳してあるのが翻訳調なのです。最近では、翻訳調の総本山といえる哲学の分野でも、意味を伝えようとする翻訳があらわれています。翻訳調の信奉者はこうした翻訳について、「読みやすいが正確さに欠ける」と非難します。こう非難する人には、何を基準に「正確さ」を判断しているのかと質問してみるべきです。普通はたとえば、原文の nation を「国民」「国」「民族」などと訳し分けていては、nation がどこに使われていたのかが分からなくなるではないかというのが、「正確さに欠ける」という言葉の意味です。常識をわきまえている人なら、馬鹿げていると思うでしょうが、「正確さ」という言葉はこの程度の意味で使われているのです。翻訳調が必要になった社会的条件、つまり欧米が理解することなどとてもできないほど進んでいたという条件がなくなっても、こういう意見が残っているので、翻訳調はなかなかなくなりません。

翻訳という仕事の難しさという点で重要なのは、翻訳調の翻訳なら意味を考えることなく訳していることです。ある専門分野の符丁を覚えるのは、

常識のある人にとっては苦痛でしょうが（子供なら、無意味な言葉を苦もなく覚えますが）、この障害さえ乗り越えれば、翻訳調の翻訳は機械的な作業になります。時間も手間もかけず、楽々と訳せるようになるのです。そのうえ、一見、難しそうで、知性がありそうで、偉そうな訳文が簡単に書けるのですから、何とも危険な罠です。

カタカナ調の道

翻訳理論に domestication と foreignization という言葉があります。翻訳理論のキーワードのひとつなのに、どういうわけかまともな訳語がなく（「同化」と「異化」と訳している場合がありますが）、たいていは原語のまま使われています。いかにもみっともないので、以下では「自国語化」「外国語化」という仮の訳語を使います。

いまのアメリカで翻訳理論の第一人者だともいえるローレンス・ベヌーティの著作を読むと、アメリカでは翻訳にあたって英語らしい訳にすることが強く求められているようです。ベヌーティはこれに批判的であり、逐語訳に近い形で原文の表現を活かし、翻訳であることを読者に意識させる訳文を書くべきだと主張しています。自国語化を当然とする風潮に対して、外国語化を重視すべきだと主張しているのです。

日本の翻訳の歴史と現状をみると、アメリカとは正反対の状況になっているようです。外国から進んだ文化を取り入れることがつねに翻訳の目的になっています。文化のひとつは言葉ですから、言葉という面でも、つねに外国のものを取り入れようとしてきました。外国語化が主流であり、翻訳調もそのひとつです。

外国から進んだ文化を取り入れた結果、日本の文化は豊かになってきました。日本語も例外ではありません。翻訳によって外国語の良さをさまざまな点で取り入れてきた結果、いまの日本語ができあがったといえます。典型的な例をあげれば、句読点があります。幕末から明治にかけて、欧米の書物を大量に翻訳するようになって、欧米の原語にある句読点が日本語にないことが不便に感じられるようになりました。当時の翻訳家の試行錯誤の結果、ピリオドから句点が作られ、コンマから読点が作られました。疑問符、カッコ、引用符などの符号も整備されました。いまでは、句読点のない文章は考えにくいほどになっていますが、

明治の初めまでは、句読点がないのが当たり前だったのです。これが翻訳理論にいう外国語化の典型です。外国語の優れた部分を取り入れて自国語を豊かにしてきたのです。

語彙という点では、外国語化がもっと進んでいます。この文章で使っている言葉のうちかなりの部分はもともと翻訳語として作られたものです。翻訳語を追放して純粹の大和言葉だけで文章を書くとしても、不可能なのではないでしょうか。

翻訳調について話すと、そんなものはもう古いという人もいるでしょうが、実際には外国語化という観点で見たとき、翻訳調がいまでもきわめて強固であることに気づくはずで、現在の翻訳調が翻訳調とはみえないのは、昔とは違って、漢字を使った訳語を作れるほどの教養のある人が少なくなったからだと思います。いまでは、新しい訳語はほぼすべてカタカナ語になっています。カタカナの羅列が現在の翻訳調の特徴なのです。漢字だらけだった昔の翻訳調とはまったく違うという印象を受けますが、本質は変わりません。やはり構文と語句の対対応が使われています。

カタカナ語を羅列したスタイルは昔の翻訳調とはたしかに印象が違うので、本質が同じだとしても、これを翻訳調と呼ぶのは適切ではないでしょう。そこで現代の翻訳調ともいえるカタカナ語の羅列をカタカナ調と呼ぶことにしましょう。

翻訳調とカタカナ調の違いは訳語の作り方にあります。翻訳調では漢字の組み合わせで訳語を作るのに対して、カタカナ調では原語をカタカナで表記して使います。このため、カタカナ調を使うと、翻訳調よりもさらに楽に、時間も手間もかけずに訳せるようになります。原文に訳しにくい用語がでてきたら、カタカナにしておけばいいのですから、これほど楽なことはありません。

楽な道の落とし穴

以上のように、翻訳を行うとき、実に楽な道が3つ用意されています。英文和訳、翻訳調、カタカナ調の3つです。この3つの道のうち少なくとも翻訳調とカタカナ調はある分野で正しいとされている方法ですから、なぜ使ってはいけないのかという反発もあるでしょう。ですが、この3つの道には、意味を考えなくても訳文が作れるという共通点があります。書いた本人が（この場合は訳者

ですが）、意味を理解していないときに、読者が理解できる文章ができるでしょうか。できないと考えるべきでしょう。翻訳に用意されている楽な道を選ぶと、意味が読者に伝わらない訳文ができる。ここに問題があるのです。

翻訳調の場合には、ある意味でそれで良かったといえます。翻訳調は、原文の意味を伝えることを意図していません。意味が分からないほど難しいことを前提に、とりあえず日本語で読めるようにしておくのが翻訳調の目的です。意味は解説書を読まなければ分からない、いや、読んでも分からないのが普通なのです。

ですがいまの世の中で、こういう翻訳に対する需要があるのでしょうか。読者はそんな訳を求めているのでしょうか。そんな訳を読まされくらいなら、原文を読む方がいいと読者は考えるのではないのでしょうか。

読者が求める翻訳、読んでもらえる翻訳にするには、無理にでも楽な道を選ばなければなりません。意味を考えなくても訳文ができあがる道は避けなければなりません。そのための基準をいくつかあげていきたいと思います。

読者の立場に立つなら、年間に8万点に近い書籍が出版され、マスコミやインターネットで無数の情報が提供されているいまの世の中で、訳者が意味を考えずに機械的に訳した文章を読む理由はありません。どれほど評判になっていても、ベストセラーになっていても、そういう訳は読まないのが正解です。ですから、避けるべき訳の見分け方を覚えておくことと便利です。以下にあげる基準は、訳者への助言という観点からのものですから、基準のいくつかを満たしていなくても、訳の質が低いとは限りません。ですが、訳の質を見分ける際にある程度の目安になるでしょう。

楽な道避けるには

英文和訳の道、翻訳調の道、カタカナ調の道はどれもすぐ手近に用意されているので、訳にあたって一瞬気を緩めると、これらの道に入り込むことになりかねません。そこで、楽な道に入り込まないように、いくつかの障害物を設けておくのがいいと思います。

第1に、代名詞、とくに人称代名詞を最大限に

使わないようにするべきです。「彼」「彼女」「あなた」「わたし」などの代名詞は大部分、欧米の文章を翻訳する際に外国語化の方法のひとつとして取り入れたものであり、まったく使わなくても日本語の文章は書けます。代名詞をなるべく使わないようにすると決めておけば、機械的な翻訳は難しくなり、原文の意味を考えるきっかけになります。

第 2 に、学習用の英和辞典に太文字で書かれているような常識的な訳語はなるべく使わないようにするべきです。単語や連語をみて反射的に頭に浮かぶ訳語は正しい場合もちろんありますが、意味を考えることなく、訳語だけを覚えている場合も少なくないはずです。訳語ではなく意味を考えてみる。その後に意味に相応しい訳語を考えるようにするのが大切です。たとえば、but は「しかし」とは限りません。逆接とは限らず、順接の場合もあるのです。このような可能性をつねに考えてみるべきです。

第 3 に、カタカナ語はなるべく使わないようにするべきです。簡単な例をあげれば、drive と「ドライブ」には意味の範囲に違いがあります。「ドライブ」は目的がとくになく、運転そのものを楽しむ場合に使いますが、drive はたとえば通勤のための場合にも使います。一般的にいて、カタカナ語の意味範囲はかなり狭く、原語の意味範囲のうちごく一部の特殊な部分だけが重なっているにすぎません。この点を意識するだけでも、カタカナ語をかなり減らせるはずです。

第 4 に、各種の符号をなるべく使わないようにするべきです。句読点や引用符は使わないわけにはいきませんが、疑問符、感嘆符、ダッシュなどは翻訳以外の文章ならほとんど使わないのが普通です。原文に疑問符やダッシュがあるからといって、訳文に疑問符やダッシュが必要だとはいえません。符号を減らすと、機械的には訳せなくなり、文章を工夫しなければならなくなります。

第 5 に、ヤード・ポンド法が使われている場合、特別な理由がないかぎりメートル法で表記すべきです。意味を考えるきっかけになり、思わぬ間違いを減らすこともできるでしょう。

第 6 に、英字や洋数字は可能なかぎり避けるべきです。翻訳論では前述のように、domestication と

foreignization を原語のまま使っています。それだけでなく、翻訳論を translation studies と表記し、人名も Lawrence Venuti などのように表記する人が多いようです。これは言葉に、日本語に、翻訳にいか鈍感かを示すものだと思います。訳語を考える手間すら省いているのですから、まともな文章になるはずがないといえます。翻訳にあたって英字を使えるのは略語だけと考えておくといいでしょう。

第 7 に、構文の訳し方として常識になっている方法をできるかぎり避けるべきです。たとえば、原文の主語を「～は」「～が」と訳さない方法を考えてみるべきです。関係詞の制限用法を前から訳す方法を考えてみるべきです。こうした方法をいつも考えていると、意味を考えない機械的な訳を避けられるはずはです。

第 8 に、これが決定的な点ですが、訳そうとするのを止めて、文章を書く姿勢をとるべきです。訳そうとすれば機械的になり、意味を考えなくなりかねません。書く姿勢をとれば、何を読者に伝えるかを考えざるをえなくなります。翻訳は訳すのでは書く、これがコツです。

翻訳にあたってはこのように、たくさんの障害を設けておくことが大切だと思います。障害を設けて、楽な道に入り込まないようにしておくべきなのです。楽な道への無理やりにも避けたとき、原文の表面の裏に、豊かな意味の世界が開けていることを意識できるようになります。原文をまったく違った観点から眺められるようになることもあるでしょう。その結果できる訳文は、意味を考えない機械的な訳文と、ほんのわずかに違っているだけかもしれません。ですが、ほんのわずかの違いで文章が生き活きたものになる場合もあるのです。もっともこれは第一歩にすぎません。名訳への道にはまだまだ先があります。

古典翻訳塾第1期塾生募集の案内

「翻訳通信」2005年10月号でお知らせした古典翻訳塾の第1期塾生を以下のように募集します。

期間

2006年1月より12月まで1年間。

場所

田園都市線鷺沼駅（渋谷駅より約20分）近くの山岡事務所。なお、第2期以降は首都圏以外でも開催を予定。希望者は連絡ください。

方法

1年間に約200ページの古典を全員が全文を訳し、電子メールを使って訳文を交換し、議論するとともに、当初は週1回、その後は月1回集まって議論する。

題材は英語で書かれたエッセイ風のもの（たとえば自伝）を使う予定だが、塾生の希望と意見を聞いたうえで最終的に決定する。

塾生の資格

古典翻訳を真剣に目指している人。翻訳経験、学歴などは問わない。ただし、古典翻訳に必要な実力を備えていることが条件であり、その点を確認するために入塾試験を行う。

募集人数

8名まで。入塾試験の結果によって、これより少なくなる場合がある。

受講料

年に10万円。

入塾試験

19世紀の小説または論文のうち1つを約1ページ訳出。

応募

電子メールで山岡（GFC01200@nifty.ne.jp）まで連絡ください。入塾試験の問題と応募方法をお知らせします。

締め切り

応募の連絡期限は12月9日（金曜日）。
入塾試験の提出期限は12月16日（金曜日）。

疑問、質問があれば、山岡まで連絡ください。

古典翻訳塾説明会の報告

11月13日に古典翻訳塾の説明会を開催しました。出席者が予想をはるかに上回る盛会でした。実際に訳したい本がある方が多かったようで、心強く感じています。

説明会の出席者のうちひとりには、古典翻訳を企画中の出版社が求めている言語、分野で翻訳実績がありました。訳書を検討した結果、古典翻訳塾に参加していただくよりも、出版用の翻訳に取り組んでいただく方がよいと判断しました。幸い、編集者とも意見が一致したため、紹介することにしました。その後、翻訳する本も決まり、来年の出版を目指して翻訳をはじめることになったと聞いています。

古典翻訳塾は優秀な翻訳者を選別し、出版社に紹介し、出版につなげることを目標にします。今後も、実力のある翻訳者が見つければ、随時、出版社に紹介します。

今回は出版社の特殊な需要に対応できる翻訳者が出席していたという点で幸運だったわけですが、質の高い翻訳ができる翻訳者はまったく不足しているのが現実です。ほんとうに実力があれば、どの言語、どの分野でも機会が十分にあります。